

2021/05/23

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑤1

『わたしにあって平安を保ちなさい』ヨハネ 16:25-16:32

## ■聖霊の予告

「これらのことを、わたしはあなたがたにたとえで話しました。もはやたとえでは話さないで、父についてはっきりと告げる時が来ます。」(ヨハネ 16:25)

神様は、目に見えず、制約を受けない方です。ですから、人間が神様を表現したくても、人間の制約された言葉では表現しきれません。そこで神様は、私たちが三位一体の神を知るために、神をイメージできるようなたとえを使われます。聖霊を表すのに鳩を使ったり、神様と私たちの関係をぶどうの木と枝にたとえるなどです。しかし、ここでイエス様は、これからは聖霊が助けてくれるから、たとえを使わなくても大丈夫になると言われました。

私たちは、神のいのちを分けて造られた存在で、私たちの中には神がおられます。「神はことばである」と聖書にありますから、私たちの中には、「ことば」という概念が先にあったこととなります。そこに体が集める情報が与えられて、人は「概念」を理解するようになっていきます。たとえば、「正義」という概念を言葉で説明するのは、非常に難しいことです。すべての疑問に答えられるような説明はとてできません。言葉では説明できないけれどなんとなくはわかる——それが概念です。たとえば、犬と猫の違いを明確に説明することはできなくても、犬と猫が違うことはわかります。それは、教えられたことではなく、生まれながらに持っているものです。誰もがこの概念を持っているということは、私たちの中に神がおられて、神が語っておられるということです。神は私たちと近しく交わることを願って、ご自分のいのちを分けて人を造り、同時に神が持っている概念を与えておられるのです。

その理解を、これからは聖霊様が助けてくださるとイエス様は言われました。その言葉通り、聖霊様が本格的に働きを始められたのがペンテコステです。

「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。」(ヨハネ 16:26)

「その日」とは、イエス様が復活する日です。その時には、聖霊様が私たちのうちに働いてとりなしてくさるので、イエス様がとりなさなくても、祈れるようになります。知識で神を知るのではなく、実際に神様が助けてくださることを現実に体験するようになるのです。聞いて信じているのではなく、実際に神を知っている、私たちがそうなることを神様は願っておられます。

「それはあなたがたがわたしを愛し、また、わたしを神から出て来た者と信じたので、父ご自身があなたがたを愛しておられるからです。」(ヨハネ 16:27) (新改訳第3版)

新改訳聖書第3版では上記のように訳されていますが、この訳では、律法主義であるかのような誤解が生まれてしまいます。神は、あなたが信じたからあなたを愛してくれるわけではありません。そこで、新改訳聖書2017では、次のように訳されています。

「父ご自身があなた方を愛しておられるのです。あなた方が私を愛し、私が神のもとから出てきたことを信じるからです。」(ヨハネ 16:27) (新改訳 2017)

重要なことは、私たちが何をしたかに関係なく、神がまず私たちを愛しておられるということです。「あなたがたはそれを受け取ったのだから、祈ってごらん」と、イエス様は促しておられるのです。

## ■神は納得する対象ではない

「わたしは父から出て、世に来ました。もう一度、わたしは世を去って父のみもとに行きます。」弟子たちは言った。「ああ、今あなたははっきりとお話しになって、何一つたとえ話はなさいません。いま私たちは、あなたがいっさいのことをご存じで、だれもあなたにお尋ねする必要がないことがわかりました。これで、私たちはあなたが神から来られたことを信じます。」(ヨハネ 16:28-30)

弟子たちはイエス様の話を聞いて納得できたので「信じます」と言いました。しかし、「納得したから信じる」という信仰には問題があります。自分に納得できないと、神に対して文句を言うようになるからです。それは、信仰を働かせているのではなく、理性で神と関わろうとしているのであって、理性では神と交わることはできないのです。

神は納得する対象ではなく、信仰の対象です。それでイエス様は次のように言われました。

「イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは今、信じているのですか。見なさい。あなたがたが散らされて、それぞれ自分の家に帰り、わたしをひとり残す時が来ます。いや、すでに来ています。しかし、わたしはひとりではありません。父がわたしと一緒におられるからです。」(ヨハネ 16:31-32)

イエス様は、弟子たちに対して、「あなたがたは信じていない」と言われました。だから、これから起こることでバラバラになるということです。これが知識と信仰の違いです。

知識は見えるものに支配されますから、見える状況が変わると態度も変わります。しかし、信仰は見える状況に支配されません。たとえイエス様が迫害されて捕えられようとも変わらないのです。イエス様がこれを語っていた当時は、イエス様の評判が良かったので納得できました。しかし、弟子たちはイエス様が捕らえられた時、バラバラになってしまいました。信じていなかったからです。

理性には限界があることを、私たちは知らなければなりません。理性は因果関係をもとにします。因果関係の法則が見つかりと納得しますが、因果関係に支配されていないものは思考の対象外になります。そして、神には原因がありません。だから、人間は神のことがわからないのです。

神様は、ヨブにご自身を示して、あなたと私にはこれほどの開きがあるのだと教えました。神をわかったようなふりをして、勝手に論じるのは、傲慢なことです。バベルの塔を築いた人々と同じです。知識によって神を知ることがないのが、神の知恵なのです。神は信仰の対象でしかありません。しかし、弟子たちは信じているのではなく、納得しているだけだから、裏切ることになるとイエス様は前もって教えられました。

なぜ、イエス様は、こんな話をしたのでしょうか。それは、イエス・キリストにあって信じるという平安を持たせるためです。それは、神の言葉による平安です。神の言葉とは、あなたをそのまま受け入れ、肯定するものです。しかし、人はそれにとどまろうとはしないで、自分の力で自分を肯定しようとします。ここに問題があるのです。

私たちは本来、単独で存在することはできず、今も神が共におられます。神が共におられる……それが、私たちの真実の姿です。しかし、この世界に死が入った結果、人は有限性になり、永遠性である神を認識できなくなり、見るができなくなりました。私たちが見るができるのは、有限性の死のからだだけです。

私たちは、神のいのちに支えられて生きているので、永遠性という概念を知っています。しかし、現実の世界では永遠性は否定され、いのちが否定されています。それで、誰もが自分を否定して生きています。また、永遠性を知っているのにそれが見えないことで、誰もが不安を抱えています。その結果、見えるうわべの姿を自分の力で良く見せようとし、それを人と比べることで自分の価値を見出し、自分を肯定しようとしているのです。

しかし、それでは平安を得ることはできません。私たちは自分のうわべを知っており、嫉妬したり、恨んだり、悪いことをしてしまったり、悪いとわかっているにもかかわらずやめられない自分を知っています。神は初めからあなたの能力に関係なく、あなたを受容し、愛しておられると聞いても、こんな自分が愛されるはずがないと思って、神の愛を受け入れられず、うわべを良くする生き方を捨てられません。だから、クリスチャンになってもよい行いをしないと愛してもらえないと勘違いしている人が多いのです。しかし、神はあなたにとって友です。神は、頑張ったあなたを見つけてほめてくれるわけではありません。神は、あなたが苦しむときには、友に苦しむ、あなたの土台です。

しかし、神の言葉は見えないので、現実味がなく、安心できないため、健康も富もたくさんあるほど安心だと思ってしまうのが私たちです。現実には、人から評価されて、富をいっぱい持っているほうがいいじゃないかと思って生活していますが、どんなに私たちが神を拒否しても、復活して神の前に出るときには、「こんな罪人でも復活させてくださった」と、神の前にへりくだることになります。だから、私たちは世（死）に勝っているというのです。確かに私たちは死に負けますが、イエス様は勝っているのです。主にある私たちも勝利者になるのです。だから、何も心配しなくても、「イエス様が勝っているから大丈夫。あなたも必ず勝

つから心配するな。」と神様は言っておられます。イエス・キリストにある平安を持つためだと知る時が来るのです。

## ■神の肯定を受け取る

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」(イザヤ 63:9)

平安とは、神様は常に共にいて、私たちが苦しむときには一緒に苦しんでおられるという事実を信じられることです。見えないものを納得しようと思ってもできません。平安を得る唯一の道は信仰です。

「神が私たちが背負っている」とは、神はずっと昔から人を肯定し、受け入れているということです。人は誰もが、「受け入れられたい」という承認欲求を持っています。すでに神が受け入れてくださっているのに、私たちはそれを受け入れられないし、信じようとしません。善いことをして、頑張ったら神に受け入れてもらえると思っています。そこで神は次のように言われます。

「しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。」(イザヤ 63:10)

神は、私たちが神を受け入れられるように「戦う」と言われます。何と戦うのでしょうか。それは、神の愛を拒否する不信仰と戦うのです。つまり、「神が戦う」とは、神はあなたを愛し、助けようとするということです。これが、自分を否定する者には、自分が裁かれ、否定されているように見えますが、そうではありません。神は一貫して愛の方です。私たちは、自らを否定し、否定した自分を自分の力で肯定しようとしています。神が差し出す肯定は、この世界では役に立たないと言って拒否します。「患難」とは、神の戦いです。ここで、神様は、心配しなくても、必ずあなたは負けて、神の肯定を受け取るからと言っておられます。もちろん私たちは、「イエス様の言われたことは本当だった」と、復活するときにはわかります。けれど、その前に、へりくだって受け取れば平安を得ることができます。

旧約聖書のヤコブは、父をだまして兄エサウの長子の権利を奪いました。エサウの怒りから逃れて、おじの家に身を寄せたヤコブは、そこで莫大な富を築きます。彼は、自分の力で自分を肯定し続けたのです。ところが、今度はおじの嫉妬を買い、そこにもいられなくなったため、故郷に帰るしかなくなってしまいます。どちらに進んでも命を狙われる八方ふさがりの状態になり、ヤコブは自分の力で手にしてきたものが何の役にも立たない状態に追い詰められました。このように、自分を肯定するために自分の力で手にしてきたものが役に立たなくなる状態のことを「患難」と言います。

神様はこの状態を静観していらっしゃいました。そして、ついに患難に耐え切れなくなつたヤコブは神に助けを求めました。「私を助けてくれ」と一晩中御使いと格闘したのです。このようにして彼は砕かれ、神のことばを無条件で受け取れる状態になりました。その時、神は彼に「イスラエル」という名を与え、それがイスラエル国家の始まりとなりました。神様はヤコブの行いを見て、「なんと悪いやつだ」などと責めたりせず、ただ肯定してくださったのです。自分の努力によって自分を高めて肯定するのではなく、自分を低くする者が神の肯定を受け取れるのです。

こうしてヤコブは真の平安を手に入れました。

神様は私たちにそのような平安を受け取れることを望んでおられます。自分で納得する平安ではなく、へりくだって神の言葉を受け取って信じる平安です。心配しなくても、私たちはその平安を受け取ることができます。たとえ拒否し続けても、最後は私に負けるから大丈夫だと神様はヤコブを通して教えてくださっています。私たちは自分は愛されるはずがないと思っていますが、そんな私たちであっても神は受け入れてくださっています。

私たちがすべきことは、神が愛している自分自身こそ、本当の自分だと受け取ることです。それが、真にへりくだり、神の言葉を信じた状態です。その時、私たちは真の平安を手にするのです。